

も、なかなか話が通じにくくなっている。まして大学の初年級の学生に対して解説することはかなり難しいことであると言わざるを得ない。予備知識の準備を少なくするために、具体的で易しい実例を使うことにより、高度な理論の雰囲気伝えられればよいと思う。

数学の用語がわかりにくくなった原因のひとつに、数学の抽象化が挙げられると思う。二十世紀の初めぐらいから抽象化の動きが始まり、以前とは様相が一変してしまった。抽象化が行われたひとつの理由は、一見違うような対象でも、ある種の共通性（ブルバキは構造と呼んでいる）を持てば、その部分に関しては全く同じような結果が得られるという利点があるからである。最

近は高校でも代数では行列を教えている。これは線型空間上の線型作用素としてとらえることができる。この理論（線型代数学）のおかげで、ある種の微分方程式と漸化式の解き方が、全く同じ原理に従うこともわかる。前者では微分の持つ線型性という性質が重要なのである。

現代数学の用語は抽象的なものが多く、とっつきにくい面を持っている。だが抽象化された背景には必ず多くの具体的な対象があるはずであり、抽象化することによる御利益もあるはずである。このような具体的対象を使って、現代の数学の様子を敷衍を低くして一般教育科目として語ってみたいと思う。

勸善懲惡

小林 立

1961年4月12日、人類初の宇宙飛行士ガガーリンは地球の周りを飛行して地上に帰還した時、“地球は青かった”と述べたという。青い地球の日本において“小さな親切運動”が提唱されて既に久しい。国の内外に目を向けた組織的で規模の大きな善意の運動には例えば緑の羽根、赤い羽根、歳末助け合い、災害救援、難民救済、飢餓に苦しむ人々の救援、緑と地球を守る運動など、時に応じて以前からも展開されている。しかし人間の善意と思いを発揮する場はその外にも大小各種無数に存在するだろうし、実践できる性質のものに違いない。“一日一善”とも言われる如く、“小さな親切運動”は日常生活の場において小さな

善意と思いをやりを実行しよう提唱されたものであると理解してよいのではなかろうか。それは人間の心の健康にとって不可欠な精神的栄養分を与えてくれる運動でもあると言って間違いはないのではあるまいか。

他方また人間は“万物の靈長”とも呼ばれ、それ故に義憤と憎惡の感情を表現して正義感・優越感・差別感など心の満足を求めて止まない一面もあると言えるのではなかろうか。例えば昔は“村八分”という言葉もあったから悪い子に対しては村ぐるみで懲罰運動も展開されたに相違ない。従って悪い子の中には“石をもて追はるる如くふるさとを出でしかなしみ消ゆる時なし”といったケースも少なくなかったことだろ

う。“衣食足って礼節を知る”といわれるように人間の健全な精神にとって小さな親切運動に共鳴し実行することと同じ程度に“小さな懲罰運動”に参加することは車の両輪の如く必要なものであると言えるのではなからうか。それは人間の正義感・優越感・差別感の充足を満たす上で重要な運動の一つでもあると言えるに違いないのである。ただ小さな親切運動はおおびらに推奨できるが小さな懲罰運動の方はどちらかと言えば水面下の性格を帯び陰湿なものになり易いのは止むを得ないことだろう。

“グリコ・森永事件”以後、“標的”という言葉もさして過激な印象を与えなくなったように思われる。およそ運動には目標もしくは標的が必要であるに違いないから“あこぎな商売”をやっていたり、“札つき”の悪い子がおれば懲罰運動にも都合がよいと言うこともできるに違いない。そのような悪い子には積年の悪業のツケを返済する債務があるから俗な言い方をすれば煮て食われようが焼いて食われようが自業自得と言うべきだろう。従って悪い子には“罪の償い”のほかには“一罰百戒”という教育的意義もあると言えるに違いないし、また正義感・優越感・差別感の充足を人間が実現し自己の存在感を確認するための生きた“工具”としての意義もあるだろうから、懲罰運動に参加する人間の仲間意識と連帯感の強化にも役立つという副次的役割もあると言えるのではなからうか。

街中を歩くとき“町ぐるみみんなで揃もう非行の芽”とか“地域ぐるみで青少年をすこやかに”といった標語を立看板などで見かけるが、これは現代が組織の時代であり、

青少年の健全な育成に当っても家庭や学校のみならず社会全体の環境が物を言うことを訴えている標語であろう。しかし集団のもつ威力についてその自信の程を表明している言葉としては、やはり“赤信号みなで渡れば恐くない”に勝る“傑作”はないのではあるまいか。従って例えば悪い子を衆人環視のもとに“裸”にしておけば、“窮鼠、猫を咬む”ような事は有り得ないし、いくら札つきの悪い子であっても、“赤子の手を捻る”ようなものに違いない。それに現代は情報化社会といわれるから最新鋭の科学技術を駆使すれば悪い子に関する情報の収集・管理・広報もすべての面において十二分に威力を発揮できる時代ではないのだろうか。予防措置を講じておけば如何なる悪い子であれ、誰でも安心して楽しめる工具が出来上るに違いないし、標的が自身の“人間”であってこそ人間にとって必要な正義感・優越感・差別感も満喫とはいかないまでも幾分かは味わうことも可能な工具として役に立つと言えるのではあるまいか。更にまた標的は壊れることを期待されている工具でもあると言って構わないだろうから、“みそぎ”によって壊れてもそれは“身から出た錆”であって、むしろ悪抜きに成功し、自浄効果があがったと考えるのが常識というものだろう。しかし運動自体には標的は必要な工具であるから、その需要と供給は永久になくなることもないと言って間違いないのではないか。

明日も明後日も地上の万物の霊長が展開する小さな親切運動と小さな懲罰運動を載せて“宇宙船地球号”は太陽の周囲を飛び続けることであろう。